西南学院大学　人間科学論集　第17巻　第1号　　1―23頁　2021年8月

絵本『おにたのぼうし』を読む（1）

―「ぼうし」の含意を中心に―

古　田　雅　憲

Descriptive Study on the Picture Book“Onita’s Hat”（1）

Masanori Furuta

【はじめに】

絵本『おにたのぼうし』（ポプラ社 1969年）はあまんきみこさん（文）といわさきちひろさん（絵）のお二人の手になる作品*1。小学校の国語科教材としても長く親しまれてきた。

およそ絵本における絵と言葉（文）の関わりあい方は、もちろん作品ごとにさまざまだが――絵と言葉ともお一人の手になるものであれ、それぞれ別の方の手になるものであれ――こと時間的な前後関係については“言葉が先”という場合がまず多いようだ。

絵本『おにたのぼうし』もまた同様――作品末に掲げられた「おわりに」と題するあまんさんの文章のなかに、いわさきさんに宛てた謝意が示されているからには。（以下に該当部分のみ抄出した。）

> 叙情的なすばらしい絵を、この本のためにかいてくださった岩崎ちひろ先生に、心から御礼を申し上げたいと思います。

あまんさんが言葉を紡ぎ、それにいわさきさんが絵を添えたという経緯は明白だが、その絵を一枚ずつ丁寧に読んでみると、それらが単なる“添えもの”ではないことがよく分かる――いわさきさんは、ときに言葉として語られなかったものごとを描きあらわし、またときに言葉として語られたはずのものご

とを描きあらわさなかった。いわさきさんの絵は言葉に従属しない――言葉が語らなかった“空白”が補われ、また言葉が語ったものごとが“空白”とされる――そこに絵と言葉がそれぞれの“力”を発揮しあう相補的な関係が立ち現れて、それぞれの表現がたがいに支えあい響きあいながら“一つの力”として私（読者）を物語世界に引き込んでいく。お二人の絵と言葉が協働して物語世界を豊かにする――この絵本はまさしくお二人の「共作」と言うべき作品である。

この物語の絵と言葉は、言わば“フィフティ・フィフティ”の関係のなかで支えあい響きあいながら、読者たちによって自由に多様に読み解かれることを待っている――『おにたのぼうし』の物語世界を絵本として味わいたいと願う所以である。

なお以下に掲げる図版と本文はすべて、お二人の手になる『おにたのぼうし』（ポプラ社 1969 年）から法令の定めるところに遵って引用していることをあらかじめ明記する。

【表紙絵】（下掲図版：註 1 に掲げた書籍から許可を得て転載）

まずは無心に絵を読むことから始めたい――繰り返しこの絵本を読んできた私（読者）には既知のことも多いが、まずは無心に絵を読みたい。

描かれているのは半裸の子供――6、7 歳と思しい少年だ。裸で麦わら帽子をかぶっているところを見ると、ここは夏の海辺あたりなのだろうか。彼の帽子はちょっと破れていたり汚れていたりするから、ずいぶん古い物らしい。

海辺で長いこと遊んでいたからか、まだ幼さの残る彼の身体は真っ黒だ――夏の日射しのせいですっかり日焼けしたのかもしれない。帽子の下からのぞく髪は茶色だ――潮風に長くさらされたからかもしれない。もちろん、すべて生まれついての彼自身ということかもしれない。

帽子の首ひもを左右の手でしっかり握っている。（風に飛ばされまい）と用心しているのだろうか。あるいは（脱がされまい）と心配しているのだろうか。

彼は大きく目を見開いて私（読者）をじっと見つめている。まるで私に何か訴えようとしているかのようだ。が、彼の唇は真一文字にキュッと結ばれていて、私などに軽々しく自分の思いをうち明けるつもりはないらしい。

それにしても彼が悲しそうに見えるのは――目にうっすらと涙がにじんでいるからだ。その涙のわけは、たとえば（海辺で遊んでいるうちに友だちとケンカしちゃってさ…）などといった他愛ない話ではなさそうだ――真一文字に結ばれた唇が、何かもっと深い思いを懸命にせき止めているようにも見えるからだ。

◇　　◇

表題に「おにたのぼうし」と言う。「おにた」とはこの少年の名前に違いない。そう呼ばれるからには（たぶん鬼の子だろう）と想像することは容易だ――もちろん確証はない。というのも鬼のシンボルであるつのが帽子に隠れて見えないからだ。もしかすると、この子供が両手で帽子のひもをしっかり握っているのは（風が強くて飛びそうだから）ではなくて、（つのが生えたホントの姿を隠したいから）かもしれない。鬼の子であるせいで何か悲しいことがあったのかもしれない、だからうっすらと涙を浮かべているのかもしれない。いったい「おにた」とは何者で、その「ぼうし」とは何を意味するのか――物語の行方をたどる前からいろいろなことを予感させる表紙絵だ。

【扉絵】（下掲図版：註１に掲げた書籍から許可を得て転載）

帽子を手にした〈おにた〉が両脚をしっかり踏ん張って何やら話をしているようだ――顔を上げ、相手に堂々と向き合って。

彼が話しかけている相手は、年格好が同じくらいの子供だ。優しいなで肩をしていて、白いワンピースを着ている――女の子のようだ。白いハイソックスにベージュ色の靴を履いている。（実は【13-14 頁】に描かれる〈おんなのこ〉とそっくり同じ姿だ――それはもちろん後に分かること。）

ここでは後ろ姿なので彼女の表情は見えない。また全体に薄紫色のぼかしが

かかっているので、しぐさもハッキリとは見えない。それでも、白くぼんやりと浮かんだシルエットは両腕を自然に下ろしている（肩に力が入っていない）ように見えるから、つのを露わにした〈おにた〉を前にしても格別驚いたり怖がったりはしていないようだ。

〈おにた〉の表情は喜怒哀楽のいずれとも定かには読みとれない。開いた右の手のひらを少女に向けて、ただ淡々と何やら話しかけている様子だ。帽子を手に、静かに何ごとか説明しているようにも見える。（もしや「この帽子はね…」などと、その由来や使い道を説明しているのかもしれない。）

もっとも、〈おにた〉が人間の前で帽子を脱ぐような場面は物語のなかではけっして語られない。作品を読み終えた後、そう知ったうえで改めてこの絵を見返すならば、それが，言わば“語られなかったもう一つの物語”の一場面であったことに気づかされる――“帽子を脱ぐおにた”とはいわさきさんの願いであったろうか。またあまんさんの望みでもあったろうか。そう思えば、巻末の「おわりに」の表現もまた“含み”があるように見えるのだった。（該当部分のみ抄出した。）

> ところで、文明の発達とともに、オニの魔力威力も、地に落ちました。どうも、このごろのオニは、帽子をかぶりたがっている気がします。そして、トラの皮をまとった自らの姿をはじて、オニオコゼどころか、雲霧四散したがっているようにさえ思われてきました。

ちなみに、この扉絵を効果的に使った授業実践について、村上呂里さん*2が詳しい分析を示していらっしゃる――とても興味深い。

【1-2 頁の言葉と絵】（下掲図版：註 1 に掲げた書籍から許可を得て転載）

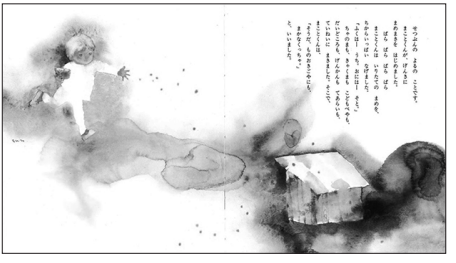
物語はある年の節分の夜の場面から始まる。

> せつぶんの　よるの　ことです。
> まことくんが、げんきに　まめまきを　はじめました。
> 　ぱら　ぱら　ぱら　ぱら

まことくんは　いりたての　まめを、ちからいっぱい　なげました。
「ふくはー　うち。おにはー　そと。」
ちゃのまも、きゃくまも　こどもべやも、だいどころも、げんかんもてあらいも、ていねいに　まきました。そこで、まことくんは、
「そうだ、ものおきごやにも、まかなくっちゃ。」
と、いいました。

〈語り手〉は第三者の視点から、言わば“世界を見守る者”として、この物語を〈まことくん〉ちの豆撒きの場面から語り起こす――毎年恒例、年中行事としての豆撒きだ。〈まことくん〉には（闇に潜んで災いをなす鬼を懲らしめ追い出し、家族のみんなを守らなければならない）などといったような使命感や切迫感などまったくない、もちろんのこと。彼にとってそれは“遊び”だ、今日の多くの子供たちと同様に。したがって〈まことくん〉には鬼に対する偏見もないし、鬼たちを差別し排斥しようとする意志もまたない――たとえば絵本やお話会で見聞きしたイメージを抱きつつ（鬼なんてホントにいたりはしないさ…でもちょっと恐いよなぁ…）くらいのことは思っているに違いないけれど。

◇　◇



画面左上に描かれた少年が〈語り手〉の言う〈まことくん〉だ。上下とも白い服を着ている。赤いズックを履いているから、白いパジャマ姿のまま表に出て、庭にある物置小屋に向かって豆撒きをしているのだろう。口もとを少しほころばせて満足そうだ。鬼を怖がる様子など微塵も見えない。

物置小屋を包む夜の闇が、たっぷり水を含ませた紙面にぽとりぽとりとたらしこんだ墨によって描き出されている。〈まことくん〉は右手に青い小箱を持ち、そこに入った豆を、闇に浮かぶ物置小屋めがけて投げつけている――元

気いっぱいの躍動。擲たれたいくつもの豆がキラ星みたく光っている。

◇　◇

それにしてもいわさきさんの絵は時に“現実”を軽々と超えていく――〈まことくん〉は物置小屋よりずっと高いところを、あたかも風の神様みたく中空を翔けめぐっているのだ。その姿はおよそ現実のものとも見えないが、だからこそ“子供”の持つ不思議な生命感や躍動感がかえってよく伝わる。

私はこの絵を見ると「風神雷神図屏風」のことをつい思い出す――あの俵屋宗達が描いた屏風絵だ。（ちなみに「たらしこみ」という描画技法は早く宗達が始めたものという。）

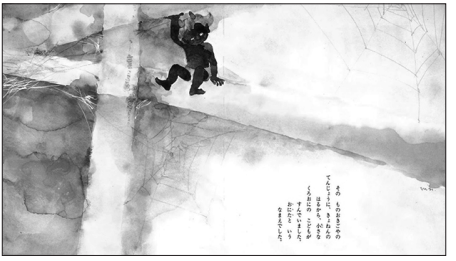
宗達がその屏風に描いた二人のうち、向かって右側が「風神」だ。たっぷりの風に乗って豪快な笑い声をあげながら、黒雲とともに宙を駆けめぐっている――何という爽快感、生命感、躍動感。図像としては左右反転しているが、この神様の姿が、私には〈まことくん〉と二重写しに見えるのだ。

もちろんいわさきさんが宗達絵に直観を得たかどうかはしらず、少なくともその屏風絵を思いあわせる私には、風神みたく宙を翔けめぐる〈まことくん〉の姿は、この絵本作品の冒頭にあって（これから始まる物語は一種の“神話性”を帯びている）と感じる契機となる。その“神話性”こそは、その実在を疑われるべき“鬼”をまさしく実在する者として語り起こすうえで“不可欠なしかけ”である――それに導かれて私は“神話”としての「おにたの物語」にスッと入りこんでいくのだ。（もっとも、この絵本を読んでいる子供たちはそういう“しかけ”に気づきもしないだろうし、気づく必要もまたない――それはそれで何の問題もないことだ。“しかけ”などなくとも、子供たちは理屈っぽい大人よりもずっと軽やかに、たとえそれが荒唐無稽の非現実世界であったにせよ、実にやすやすと分け入ることができるのだから。）

【3-4 頁の絵と言葉】（下掲図版：註 1 に掲げた書籍から許可を得て転載）

小屋組のはりの上に〈おにた〉がちょこんと座っている。

彼は帽子をかぶっていない――彼は今、人間の目を気にすることもなく安心しきっているのだ。その油断のせいで、私（読者）にも小さなつのがちゃん



と見える。やっぱり彼は鬼の子だった。

彼の背格好に比べるとずいぶん太い材木が縦横に組み合わされている。それほど大きな物置小屋でもなさそうだから、結果的に〈おにた〉の“小ささ”や“幼さ”が強調される。（実際、表紙絵や扉絵の〈おにた〉よりも何歳か幼げにも見える。）

あちらこちらにクモの巣が掛かっている。日ごろからあまり人間が立ち入らなかったらしい。人間の目の及ばない薄暗い物置小屋の隅は、小さくて幼い鬼の子がひそかに暮らすのにはぴったりの場所だったに違いない。なるほど、はりに腰掛けて下の方を見おろしている〈おにた〉は口もとをちょっとほころばせている――何の不安も感じず穏やかに暮らしていた様子だ。

◇　　◇

物語の〈語り手〉は次のように話を進める。

> その　ものおきごやの　てんじょうに、きょねんの　はるから、小さな　くろおにの　こどもが　すんでいました。おにた　という　なまえでした。

この語りのなかに「きょねんのはるから」と言う。〈おにた〉が置かれている境遇や彼の心境を考えるうえで見過ごせない表現だ。

これについては成田信子さんや幾田伸司さんのご指摘*3のとおりで――〈おにた〉は去年の春の節分の晩、今夜の〈まことくん〉ちと同じように豆撒きをした家から逃げ出さざるをえず、その晩遅くにようよう〈まことくん〉ちの物置小屋に棲みついたのだった。「きょねんのはるから」という表現はそういう事情を明らかに示している。たぶん〈おにた〉はそれ以前にも節分ごとに棲みかを追われ、毎年、二月の夜の寒さに震えながらあちらこちらをさすらってきたのだ。

そういう境遇にあった〈おにた〉が、鎌田均さん*4の表現を借りれば「幼いながら、人間からの差別や偏見を痛みとして経験的に知っている」のは確かなことだ――彼の知る「痛み」がそういう差別や偏見などで受けた“心の傷”から発していることはもちろんのこと、それと同時に、彼の皮膚を擲つ豆や、目を刺す柊や、手足を凍えさせる霜雪や（不思議とひもじさについては本文にも言及がないが）、そういう現実的な“身体の傷”から生じていることにも意を留めたい。小さくて幼いものにとっては、彼の身体じたいが直に感じる“現実”としての痛みもまた（むしろ文字どおり）致命的な“傷”であるに違いない。そういう“心と身体の傷”の痛みを〈おにた〉という子供は身を以て知っているのだった。

【5-6 頁の絵と言葉】（下掲図版：註 1 に掲げた書籍から許可を得て転載）

おにた　あいい　おでてた
ぼくの　ぼくのです
こんなの　ぼくのです　ぼくです
ぼくの　ぼくのです
ぼくの　ぼくのです
ぼくの　ぼくの

良さ”は感じられない。そこには何だかもっと切羽詰まった思いが秘められているようだ。

◇　　◇

ここで〈語り手〉は〈おにた〉の生活の一端を次のように語る。

> おにたは、きのいい　おにでした。
> きのうも　まことくんに、なくした　ビーだまを　こっそり　ひろってきてやりました。
> このまえは、にわかあめの　とき、ほしものを、ちゃのまに　なげこんでおきました。おとうさんの　くつを　ぴかぴかに　ひからせておいたことも　あります。
> でも、だれも　おにたが　したとは　きがつきません。はずかしがりやの　おにたは、みえないように、とても　ようじんしていたからです。

〈語り手〉によれば、〈おにた〉は（洗濯物を取り込んだりする以外にも）〈まことくん〉がなくしたビー玉を拾ってきてあげたり、お父さんの靴をぴかぴかに磨いてあげたりして、とかく〈まことくん〉ちのみんなに対して一生懸命に尽くしているのだそうだ。（他にもいろいろな善行を尽くしているのだろう、たぶん。）

そういう〈おにた〉の行いについて、〈語り手〉は「おにたは、きのいい おにでした。」と言い、それらの行いがすべて彼の“気の良さ”に発するものであるかのように言う。

が、私には到底そうは思えない――洗濯物を取り込む〈おにた〉の横顔に浮かぶ、何か思いつめたような真剣さと緊張感を知っているからだ。たぶん何事であれ〈おにた〉が〈まことくん〉ちのみんなに関わるときには、きっといつも張りつめた真剣な表情を浮かべていたのだ。

そういう〈おにた〉の心境をひそかに想像するなら（おいら鬼だけどさ、ホントに良い子なんだよ、まことくんちの役に立つしさ、何だってやるからさ、もう追いださないでおくれよぉ…）といった悲壮感に塗りこめられていただろ

う。それは〈おにた〉のような小さくて幼い生命がきっと願い求めずにはいられない、本能的な“承認欲求”の切実な現れと言っても良い。そしてまた周囲からの承認を得るために、〈おにた〉は（みずから善良な者であろう）と固く（かわいそうなくらい）心に思い定めているのだろう。

◇　◇

ただ一方で〈おにた〉は、〈まことくん〉ちでいろいろな善行に励みながらも、誰にも見えないように知られないようにと人目を憚って、とても用心しているのだそうだ。

そういう〈おにた〉の振る舞いについて、やはり〈語り手〉は「はずかしがりやの おにた」と言い、その振る舞いが彼の“はじらい”に発するものであるかのように言う。

が、これもまた、私には到底そうは思えない――〈おにた〉が人間の仕打ちによって幼い心と小さな身体にたくさんの傷を受けてきたことを知っているからだ。彼の用心は人間に対する本能的な恐怖の表れであるとしか思えないのだ。

この点、鎌田均さん*5が次のように述べていらっしゃる。

> 「おにた」は自分たちのような鬼を忌み嫌い排斥しようとする人間に向けて、自分を受け止めてほしいという欲求をメッセージに込めずにはいられない。存在に気づいてもらいたい、けれども気付かれるのがこわい。この二律背反な思いの中に引き裂かれそうになりながら「おにた」は暮らしていたのだろう。

ご指摘のように、〈おにた〉の心が（自分の存在を受け容れてほしいと願いながら、でも自分の存在を気づかれるのは恐い）という「二律背反」の状態にあると思えば――彼の心が人間に対する希望と恐怖の“アンビバレンツ”に引き裂かれそうになっていると思えば、せっかく善行を尽くしていながらも、彼の横顔に何か思い詰めたような真剣さと緊張とが浮かんでいるわけがスッと腑に落ちる。

そういう〈おにた〉の心境の深刻さを思えば、「きのいいおにでした」とか「はずかしがりやのおにた」などと言う〈語り手〉の言葉は、実はそのまま信用してはいけないのかもしれない――この点、幾田伸司さん*6が「「去年の春」以前のおにたの境遇をコンテクストに取り込むと、「気のいい」「はずかしがりや」という叙述自体が、読者によって問い直されることとなる」とおっしゃるとおりだ。この作品の〈語り手〉は、実は“信用できない語り手”なのかもしれない。（そういう“役回り”をあえて演じているのかもしれない。）

◇　　◇

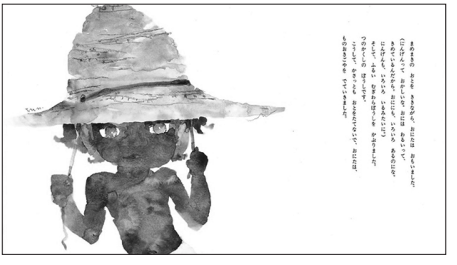
ただ一方で、幾田さん*7は次のようにも述べていらっしゃる。

> おにたの境遇を思いながら、彼の痛みに触れないようにあえて「気のいい」と語ることに語り手の優しさを読むこともできる。

示唆に富むご指摘だ――この物語の〈語り手〉は“あえて知らないふりをする（ふりができる）語り手”かもしれないということだ。

いずれにしても――この〈語り手〉が“信用できない”にしても“あえて知らないふりをする（ふりができる）”にしても――いずれにしても、この〈語り手〉の言葉の上っ面をうのみにしては理解を誤ることもあるということなのだろう。このことは、この絵本作品じたいの構造やその読み深めにも大きく関わる問題である。

【7-8頁の絵と言葉】（下掲図版：註1に掲げた書籍から許可を得て転載）



これは表紙と同じ絵だ。その時には（夏の海辺で遊んでいる、真っ黒に日焼けした少年かな…でも、それにしては…）と読んだが、ここまで作品を読み進めて（この子供が心のうちに深刻なアンビバレンツを抱え込んだ鬼の子らしい）と知ったうえで改めてこの絵を見ると、私

はほとんど打ちのめされそうになる。

彼の表情や仕草からは静かな悲しみのようなものが伝わってくるばかりで、そこに他者に対する怒りやそれに基づく抗議の意志は（少なくともそれと分かるようには）表されていない――たとえば拳を突き上げるでもなく、またこちらを指さしてにらみつけるでもなく、彼はただ唇を真一文字にきゅっと結んで口を閉ざし、つの隠しの帽子が脱げないように首ひもをしっかりと握っているばかりなのだ――全体「受け身」の姿勢――自分を（あるいは自身の壊れそうな心を）、その帽子でもって他者の視線から守ろうとしているばかりで、そこに攻撃的な感情や他者に強く訴えかけようとする意志はかけらも見出すことはできないだろう。

◇　　◇

物語の〈語り手〉は次のように話を進める。

> まめまきの　おとを　ききながら、おにたは　おもいました。
> （にんげんって　おかしいな。おには　わるいって、きめているんだから。
> おにには、いろいろ　あるのにな。にんげんも、いろいろ　いるみたいに。）
> そして、ふるい　むぎわらぼうしを　かぶりました。つのかくしの　ぼうしです。
> こうして、かさっとも　おとをたてないで、おにたは、ものおきごやをでていきました。

まず〈語り手〉の視点の“ゆれ”に留意したい――その人は“世界を見守る者”として語りを行ってきたが、ここでは“おにたの代弁者”を兼ねて振る舞っている。〈おにた〉のことを「気の良い」「はずかしがりや」と評するのが“第三者”であってみれば、私（読者）も「到底そうは思えない」と異を唱えることもできるが、“代弁者”が言うことならば否も応もない――変幻自在の語りに幻惑される思いだ。（その人の言葉を信じて良いのか悪いのか。）

ともあれ、その語りを承けて絵を改めて見てみると、画面いっぱいに描かれた〈おにた〉の姿は、〈まことくん〉ちの物置小屋からこっそり去っていく際のものだったと分かる。涙さえ浮かべているような彼の姿には、やはり怒りやそれに基づく抗議を表明するような強い意志は含まれていなかったのだ。であればまた、その際に〈おにた〉がつぶやいたという言葉――（にんげんって おかしいな…）のうちそとにも、攻撃的な感情や他者に強く訴えかけようとする心情は含まれていないのも自明のことだろう。

この〈おにた〉の内言については何人かの方がお考えを述べていらっしゃるが、そのなかでも私には幾田伸司さん*8のご指摘がもっとも自然に聞こえてくる。

> この心内表現に用いられている「って」形や終助詞「な」には、「にんげん」に対するおにたの強い抗議のニュアンスは含意されていない。また「かさっとも音を立てないで」まことくんの家を後にするおにたの行動からは、彼の未練や憤慨を読み取りにくい。おにたは、にんげんに対する不満を持ちながらも、不条理な運命を甘受しているように見えるのである。

今、この頁の絵と言葉とを読みあわせながら、改めて〈おにた〉という主人公の“ありよう”について言葉を重ねるなら、彼は――みずから善良な者であろうと固く決心し、そう振る舞いながらもなお望むようには紡がれない人間（周囲の他者）との関係にわだかまりや悲しみを覚えつつも、しかし、だからと言って相手に対する怒りや抗議の表出は行わず（ただ静かに状況を受け容れて）、むしろそういう関係性しか紡げない責任を自分の側に求め、そういう自分を隠すことで当面の平穏を得て生きていこうとしている――そういう子供と見えるのだった。

◇　◇

それにしても気になることが一つある――その「ふるい むぎわらぼうし」は誰の物だったのかということだ。〈語り手〉はそのことについて何も語らない。（何も知らないのか、知っていてわざと語らないのか。）

これより前の場面（表紙絵・扉絵を除く）で〈おにた〉は帽子を被っていないから（もちろん帽子をかぶる必然性のない場面だったが）、もしや〈まことくん〉ちの物置小屋にしまってあった物を勝手に頂戴したということだろうか。

もちろん古くて汚れたり破れたりもしているような麦わら帽子だ。たぶん持ち主も物置小屋に放りこんだまま忘れているような物かしれない。が、だからと言って勝手に持っていって良いということでもあるまい。それは歴とした“盗み”には違いない――大仰に言えば「〈おにた〉は盗みに手を染めたのか」という話である。

もちろん〈まことくん〉ちでの振る舞いを思い返せば、〈おにた〉は他人の物を失敬することに“後ろめたさ”を感じないような子供ではない。〈おにた〉はみずから（善良な者であろう）と固く決心しているのだ。いくら物置小屋から追い出されるからと言って（そのしかえしみたく）、〈おにた〉が〈まことくん〉ちの物を勝手に持っていくようなまねをするとは思えない――ただ確証はない。この〈語り手〉は“あえて知らないふりをする（ふりができる）語り手”かもしれないからだ。〈おにた〉の盗みを見て見ぬふりしたのかもしれない。

ここで（あの〈おにた〉がまさか盗みなどしないだろう、いや、でももしかすると…）と解釈の余地がゆらゆらと残ってしまうことが、実は後々のエピソードを読み深める際に重要な“鍵”になってくる――たとえば〈おにた〉が〈おんなのこ〉のために節分のご馳走を持ってくる場面の読みに関わることだ――彼はどこからそのご馳走を持ってきたのか。（もしやどこかの家からこっそりと…などの疑念のことだが、それについては後に改めて取り上げる。）

◇　◇

ただそれはそれとして私には、〈おにた〉がこの帽子を〈まことくん〉ちの物置小屋から勝手に持ち去ったとは、やはり思えないのだ――この「ふるいむぎわらぼうし」という表現のなかの「ふるい」が気になるからだ。

その語は、もちろん帽子の“物”としての古さを言っているわけだが、同時に、今は古いその帽子がかつて「あたらしい むぎわらぼうし」だったときの“物語”を思い起こさせる――「古い」という一語は「新しい」という語との

対義関係のなかで必然的にそういうことを照らし出すからだ。

そこにはいくつかの“物語”が想像されうるのだろうが、そのなかで私は次のような光景をもっとも印象深く幻視する――それは善良な鬼（もちろん奇特な存在だ）として生きてきた《黒鬼のとうさんとかあさん》が、今よりもずっと幼くて小さかった〈おにた〉に新品の麦わら帽子を手渡しながら（それはもちろん彼らが正当な手段で入手した物に違いない）、何ごとか言い聞かせている場面だ――彼らは、幼いわが子にこう言い聞かせている――（いいかい、おにた…私たちのように良い鬼になるんだよ…でもね、どんなに良い鬼になっても人間たちには分かってもらえないからね、だからこの帽子をいつだって被っているんだよ…さもないと人間たちはおまえのことを…）のように。（ちなみに親が子供の幸せを願って「被り物を着けさせる」という話柄については、あの「鉢かづき」のことを思い出したりもする。）

――この「ふるい むぎわらぼうし」は、（今は何らかの理由で別れ別れになってしまった《黒鬼のとうさんとかあさん》がその昔、今よりも幼かった〈おにた〉に手渡した、自分の正体を隠すことで身を守る“智恵”としての）「つのかくしのぼうし」だったとする想像だ。そのような一場面を仮に置いてみると、「ふるい むぎわらぼうしを かぶりました。つのかくしの ぼうしです。」という〈語り手〉の言葉が、実にスッと自然に聞こえてくる――その帽子は〈おにた〉にとって「つのかくしのぼうしであった」のであって、改めて「つのかくしのために」手に取られたものではない――そういう読みの試みである。

◇　　◇

――荒唐無稽のおしゃべりとして一笑に付される向きもあろう。

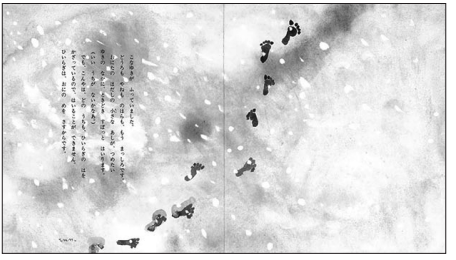
しかし、善良で慈愛に満ちた“鬼”の存在を〈おにた〉が身を以て知っていると思えばこそ、彼の（おににも、いろいろ あるのにな。）というつぶやきが、もちろんひそやかなものではあったにせよ、実は彼の心奥に根ざす確乎たる信念として聞こえてくるのだった――彼がみずから善良な者であろうと固く決心しているのは、そのひそやかな信念のゆえに違いない。

そしてまた、無償の愛に包まれる喜びを〈おにた〉が身を以て知っていると思えばこそ、後に〈おにた〉が夢中で示した“思いやり”が、しまいには自分

自身を失ってしまう悲劇を招いたにせよ、実は彼の心奥が突き動かした必然の行為として見えてくるのだった。

そのような《黒鬼の家族の物語》を“物”としての「ふるい　むぎわらぼうし」の向こう側に幻視してこそ、〈おにた〉が「ぼうし」をけっして脱ごうとしないことの含意や、また最後にそれを手放してしまう悲劇の深刻さが、ようよう腑に落ちるのではないか。

【9-10 頁の絵と言葉】（下掲図版：註 1 に掲げた書籍から許可を得て転載）



画面いっぱいに粉雪が舞う。ところどころ雪粒がすうっと尾を引いているから、ときどき冷たい風がうずを巻いているようだ。

家々の明かりが一面に降りつもった雪に照り映えているのだろうか、雪模様の向こう側に色とりどりの光がにじんでいる――一つひとつの明かりの下では、あたたかな家庭が幸せなひとときを過ごしているはずだ。

その幸せな光の投影にバッテン×をつけるみたく、黒々とした足あとが斜めに横切っていく。降りつもる雪のなかに残った〈おにた〉の足あとだ。二月の寒さのなか、〈まことくん〉ちの物置小屋から逃げ出して、次の棲みかを求めてあちらこちらをさすらう〈おにた〉の姿が目に浮かぶ――本人の姿を描かないことが、彼のさすらいの“時間と距離”の長さをかえって切実に伝えてくる。棲みかを追われた〈おにた〉は、よその家族の幸せそうな姿を想像しながら、とぼとぼと次の居場所を探しながら長い間さまよっている――ずいぶん長い距離を歩いていく。

ちなみにいわさきさんの視点が“俯瞰”に変わったことにも留意したい――直前の頁では、言わば“アップ・寄り”の正対図だったが、この頁から次頁にかけての絵は、いったん“ルーズ・引き”の画面になっている。次々頁で初めて登場する〈おんなのこ〉を再び“アップ”で描くためには、実に効果的な構成と言うべきだろう。

◇　◇

物語の〈語り手〉は次のように話を進める。

> こなゆきが　ふっていました。
> どうろも　やねも　のはらも、もう　まっしろです。
> おにたの　はだしの　小さな　あしが、つめたい　ゆきの　なかに、ときどき　すぽっと　はいります。
> （いいうちが　ないかなあ。）
> でも、こんやは、どの　うちも、ひいらぎの　はを　かざっているので、はいることが　できません。ひいらぎは、おにの　めを　さすからです。

冒頭の「こなゆきが　ふっていました。」をすっと聞けば（読めば）、〈語り手〉が“世界を見守る者”として第三者的に振る舞っていると思うわけだが、もはや【7-8 頁】で明らかなように、この〈語り手〉は“おにたの代弁者”としても振る舞うのだった。

この点、松本修さん・西田太郎さん*9が「語り手は、物語内容には関わらない超越的な語り手であり、その立場から作中人物をすべて三人称で呼ぶ語り手である。」としながらも「ただし、この情景描写（古田註；「こなゆきが ふっていました。どうろも、やねも のはらも、もう まっしろです。」の二文のこと）は情景であるがゆえに誰かの目にうつった情景でもありえるので、読み手によっては「おにた」の知覚を描いていると読むことも可能である。」とおっしゃるとおりだ。さらに続けて「こうして、語り手がおにたの知覚に寄り添っているような表現によって、読み手はおにたの知覚に寄り添うような読みが可能になっている。」ともおっしゃるが、なるほど私（読者）がいつのまにか〈おにた〉自身になって、この物語世界をそのまま体験している（ような気になる）わけだ。

この点について山元隆春さん*10はさらに積極的に捉えていらっしゃる。

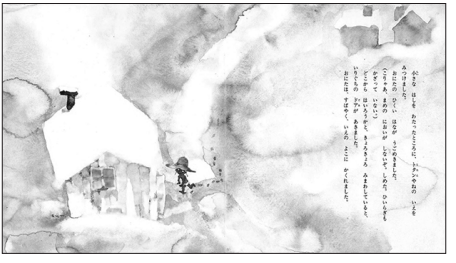
> 「おにたのぼうし」の場合にも、語り手は〈おにた〉の中の〈私〉になろうとしながら、同時に その〈おにた〉を対象化し、映像化しようとす

る。しかも、〈おにた〉を〈黒い豆〉に変えてしまうことになった〈女の子〉の中の〈私〉にも、語り手の〈私〉は通じている。この作品の複雑さは、そのように語り手の中の〈私〉が中心人物のいずれの〈私〉をも理解しようとしているところに起因する。言うなれば、複数の人物の視点に立ちつつ、語り手の内部には二つの〈私〉を理解するという矛盾を生じさせることになる。

それゆえ、読みとっていく場合にも、共感的な立場と第三者的な立場とが読者の内部で交錯することになるのである。

その〈語り手〉が意識的・積極的に「なろうとした」かはしらず、この物語の語りのうちに（結果的に）“複数の私”がゆらゆらと入れ替わり立ち替わり現れることで、そこに描きだされた世界全体の“見え方”もまたゆらゆらと揺らめいて必ずしも一つに定まらない――それもまたこの絵本作品の魅力であるに違いない。

【11-12 頁の絵と言葉】（下掲図版：註 1 に掲げた書籍から許可を得て転載）



小さな家が見える――屋根一面に雪が積もっている。たぶん 6 畳くらいの居間に小さな台所兼食堂が付いているような、とても小さな家だ。

薄茶色の板を寄せあわせて造った外壁は薄っぺらな造作で、きっとあちこちからすきま風が室内にも忍びこんでくるだろう。

屋根の上にはトタンの巻き煙突が突きでている。その黒い煙突にも白い雪がぽったりと積もっているから――それが台所の火の排気用だとすれば、今宵は火を使わなかった（料理をしなかった）のだ。（晩ご飯はどうしたろう。）あるいは風呂をたく火の排気用だとすれば（この家に独立した浴室があるとは思

いにくいが）、今宵は入浴をしないのだ。いずれにしても、この家内の冷え冷えとした“空気”が伝わってくる。

一方、画面右上に小さく描かれた（少し離れたところにある）二軒の家の煙突からは、ホワホワと白煙が上がっている――家々はたぶん暖炉か何かに火が熾って暖かく、その回りで家族が食事や団欒を楽しんでいるのだ。その対照が小さな家のさびしさやわびしさをよけいに際立たせる――この小さな家に住まう家族は何か事情があるせいで、たぶんかつかつの苦しい生活を送っている。

画面の左右中央に川が流れている――小さな川だが、画面を二分割して「小さな家」と「二軒の家」を遠く隔てているようだ――それぞれの暮らしはたがいに“川の向こう”のことなのだ。この小さな家に住まう家族は何か事情があるせいで、たぶん周囲から孤立した生活を送っている。

それでも――小さな家の窓からはオレンジ色の暖かな光が漏れている。だれかまだ起きているのだ。（夜なべ仕事でもしているのだろうか。）

今しも〈おにた〉が小さな橋を渡りきった――“川の向こう”からやって来たのだ。“あちら側”の川縁には彼の小さな足跡がぽつぽつぽつんと残っている――〈おにた〉の安住の地はあちらにはなかった。

“橋”という場の説話的なイメージを思い出すなら、この頁の画面構成は実に象徴的だ――川の“あちら側”に居場所を見いだせなかった〈おにた〉が、“橋”を超えた“こちら側”に（一時の）安住の場所を見いだしたというのだから。それは――「幼いながら、人間からの差別や偏見を痛みとして経験的に知っている」〈おにた〉が「周囲から孤立した生活を送っている」家族の住まう小さな家を見出すのは――ある意味では必然のことだった。

彼は冷たい雪のなか、長い時間、ずいぶん遠くからここまで裸足でさまよってきた。あいかわらず彼は麦わら帽子をかぶっているが、季節と言い場所と言い、あまりにらしからぬ異様な風体だ。彼が鬼でなくたって、その姿を見た人間は誰しも、きっと驚いて腰を抜かしたに違いない。

◇　　◇

“世界を見守る者”であると同時に“おにたの代弁者”でもある〈語り手〉は、

次のように話を進める。

> 小さな　はしを　わたったところに、トタンやねの　いえを　みつけました。
> おにたの　ひくい　はなが　うごめきました。
> （こりゃあ、まめの　においが　しないぞ。しめた。ひいらぎも　かざっていない。）
> どこから　はいろうかと、きょろきょろ　みまわしていると、いりぐちの ドアが　あきました。
> おにたは、すばやく、いえの　よこに　かくれました。

この語りのなかに「トタンやねの いえ」と言う。木村功さん*11が「トタン屋根は、瓦屋根に比べると安価な屋根であり、〈でこぼこした洗面器〉同様、女の子の家庭の経済状況を暗示する指標になっている。」とおっしゃるとおり、それは確かにこの家庭が経済的に難しい生活を送っている事情を示している。（ただし前頁の語りに「どうろも、やねも　のはらも、もう　まっしろです。」と言うように、すでに雪が屋根一面をすっぽり覆っているはずだから、ほんとうは「トタン屋根」かどうかなんて見えやしなかっただろう――この頁の絵に描かれたとおりだ。）

また別に（こりゃあ、まめの　においが しないぞ。しめた。ひいらぎもかざっていない。）とも言う――〈おにた〉が鼻をひくひくさせながら心のなかでつぶやいた言葉だ。それについても木村さん*12が「〈豆〉と〈柊〉が無いことも、この経済状況と関連している」とおっしゃるとおり、この家では節分の豆撒きをしなかったのではなくできなかったのだという事情を示している。

私（読者）はこの頁の絵と言葉に導かれて知っている――この小さな家に住まう家族の困窮と、その家族の孤立と、その家族のそばに〈おにた〉が（あたかも吸い寄せられるように）が近づいていく必然とについて。私（読者）はそれを絵と言葉に導かれて知っているが――〈おにた〉自身はもちろんまだ何も知らない。

ともあれ〈おにた〉は今年の棲みかをようやく見つけたのだ。ホッとしたのもつかの間、いきなりドアが開いてだれか出てきた。〈おにた〉はあわてて物陰に隠れたのだそうだ――哀しいならい。

【13-14 頁の絵と言葉】（下掲図版：註 1 に掲げた書籍から許可を得て転載）

さまざまな絵の具をたらしこんで作った“光と空気のたゆたい”を帯びて、ひとりの少女がちょっとうつむきかげんに立っている。〈おにた〉とほとんど変わらないくらいの年格好だ。

髪を“乙女刈り”にしている――今で言えば“前下がりボブ”に近い髪型で、一昔前の少女たちの普通の髪型だった。ただ毛先がずいぶん伸びているふうだから、最近あまり手入れができていないようだ。

彼女は色とりどりのきれいなボタンを付けた白いワンピースを着ている。とても清潔そうな服だが、それなりに長く着なしているのだろう、左右の袖には大きな肘あてがついている。その布じたいは黄色と青のきれいなものだが、あまり手入れが行き届いていないらしい髪型や、すきま風の吹き込みそうな住まいの造作のことなども思いあわせれば、その肘あてをしたワンピースもまた、彼女の家庭の経済的な難しさを示しているのだろう――彼女は裕福な家庭の子ではない。

彼女は右手に洗面器を持っている。白いハイソックスにベージュ色の靴を履いているから、住まいの戸口から外に出てきたところだ――洗面器を持って外に出て、いったい何をしようとしているのか。

彼女の左手は口もとにあてられている――かじかんだ指を吐息で温めようとしているのだろうか。でも唇はキュッと結ばれているから、指を温めることも忘れて何ごとか思いつめているのかしれない。何を見るともなく視線を少し下の方にやっているので、よけいさびしげな表情に見える――何か心配事があるに違いない。

◇　◇

ここまでいわさきさんは“世界を見守る者”として絵を描いてきたが、ここで初めて“おにたの代弁者”として描いた――この“光と空気のたゆたい”のなかに浮かぶ存在として描かれた少女こそ、物陰に隠れた〈おにた〉がかいま見た〈おんなのこ〉の姿だ。それは（とても澄んでいてきれいで、でもちょっとさびしげな彩りをもつ、まだ明確な形をもたずにたゆたう光と空気のよう）とでも言うしかない“気配”とともにあった――まさしく〈おにた〉の目にそのように見えたということにほかならない。私（読者）自身が今、その美しいイメージに目を奪われるように、きっと〈おにた〉もまた目を奪われてしまったに違いない。（伝統的な物語に言う“垣間見”のことを思い出す、などと言えばうがちが過ぎるというものか――いくら“むらさき”の彩りが豊かに添えられているにしても。）

◇　◇

物語の〈語り手〉は次のように話を進める。

> おんなのこが　でてきました。
>
> そのこは、でこぼこした　せんめんきの　なかに、ゆきを　すくっていれました。それから、あかくなった　小さな　ゆびを、口にあてて、はーっと　白い　いきを　ふきかけて　います。
>
> （いまのうちだ。）
>
> そう　おもった　おにたは、ドアから、そろりと　うちの　なかに　はいりました。
>
> そして、てんじょうの　はりの　上に　ねずみのように　かくれました。

私（読者）はすでに〈おんなのこ〉の暮らしの困窮と、その孤立を知っているが、〈おにた〉自身はもちろんまだ何も知らない。

彼女の帯びる不思議な美しさに見とれた一瞬の後、われに返った〈おにた〉には、まず少しでも暖かい室内に忍びこむことが必要だった――二月の厳寒

の空のもと、ここまで長い時間と距離をさすらってきたのだから。音もなくドアから入りこんだ〈おにた〉は「ねずみのように」天井裏に隠れたのだそうだ。（以下、次稿に続く。）

［註］

1）あまんきみこ・いわさきちひろ（1969）『おにたのぼうし』（ポプラ社）
2）村上呂里（2020）「「学力保障の臨床理論」と文学の授業の可能性―「おにたのぼうし」の授業の省察を通して―」（琉球大学教育学部紀要 97）
3）成田信子（2004）「新しい文学教育の地平―実践への「水路」―」（「日文協国語教育」34、日本文学協会国語部会）
・幾田伸司（2010）「文学テクストにおける登場人物の不在に関する一考察」（全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集 118）
・幾田伸司（2011）「語られなかった状況を読むことの可能性―物語テクストにおける登場人物の「不在」に着目して―」（「国語科教育」70、全国大学国語教育学会）
4）鎌田均（2003）「「読み」のベクトル―『おにたのぼうし』の場合―」（「日本文学」52（3）、日本文学協会）
5）註（4）に同じ。
6）幾田伸司（2011）「語られなかった状況を読むことの可能性―物語テクストにおける登場人物の「不在」に着目して―」（「国語科教育」70、全国大学国語教育学会）
7）註（6）に同じ。
8）註（6）に同じ。
9）松本修・西田太郎（2018）「「おにたのぼうし」における空所と語り」（「国語科学習デザイン」1（1）、国語科学習デザイン学会）
10）山元隆春（1997）「あまんきみこ「おにたのぼうし」論」（広島大学学校教育学部紀要 第一部 19）
11）木村功（2006）「教科書教材を読む（Ⅳ）・あまんきみこ「おにたのぼうし」論」（岡山大学教育学部研究集録 133）
12）註（11）に同じ。

西南学院大学人間科学部児童教育学科